

遷ろう風景 - 東京湾における散骨場 -



沢山のむこうがわ、沢山の「むこうがわ」は僕と繋がっていた。  
 物の中に散りばめられた「むこうがわ」を繋ぎ集める建築。

■ Site



■ 東京湾内岸から13km沖合  
 ・水深確保された設備の敷設方法を検討



15m以上の水深を確保し、以下に示すことで埋没から漏れを抑制することができない。

■ Scene



むこうがわを構築する事で見えてくる建築の心。

■ Section



風にして抜かれた「むこうがわ」に東風を向けたり、いままでとは違った建築の心(骨格や建築と設備の成り立ち)に寄り添っていく事ができる。

講評

「現代における葬送」という問題を深く考えて、散骨という形で一つの建築的な解を導き出そうとする意欲的作品である。その方法として「向こう側」という言葉から、生と死、陸と海、日常と非日常等が壁や水、光によって関係と断絶が空間表現されている。海の中の葬祭場、舟でアクセスして棧橋から向かう海上の道、施設の中を下降する＝海の底へ降りていく儀式的流れに沿った施設計画、そして散骨の場となる海面へとまっすぐ伸びるアップスロープは「送る」というクライマックスに相応しい厳粛な空間である。機能と空間、水と光の使い方も練られており、特に水位の変化で変わる水景と水を通した光のゆらめきは美しく荘厳な風景が想像できる。模型で表現される水面に浮かぶ白く柔らかな壁で包まれる葬送空間は、エレガントであり葬祭場というイメージを払拭している。なぜ東京湾の真ん中に葬祭場なのかという疑問に、模型表現がもう少し工夫されていれば、一切を不問にする美しさがあればと惜しまれる。秀逸な造型センスを持つ作者の将来に期待したい。(審査委員：柳田 富士男)

杉田 陽平  
 (すぎた ようへい)

日本大学  
 理工学部  
 海洋建築工学科



現在、葬送の自由の思想を基に様々な葬送行為が行われている。また、この先時代が変われば新たな葬送行為が行われ、それらに適した葬送場が求められていくであろう。

そこで本計画では、葬送行為の一つである海上散骨に着目し、海上散骨に適した施設として、東京湾岸から13km沖合に水辺空間を活かした葬送場を計画する。人の目に映る世界には、沢山の向こう側が存在している。

それは、対象者という向こう側であったり、故人が旅立った目視できない向こう側であったり、水の中を照らす光にも向こう側を感じるし、雨を降らす空にも向こう側を感じる。

世の中に散りばめられた「むこうがわ」を拾い集めるように建築に内在させることで、故人という向こう側に想いを馳せる。

